



Title	大江健三郎の研究：一九八〇年代以降の小説における自作リライトの手法 [全文の要約]
Author(s)	時, 渝軒
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12828号
Issue Date	2017-09-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/67903
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Shi_Yuxuan_summary.pdf



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：時渝軒

学位論文題名

大江健三郎の研究

— 一九八〇年代以降の小説における自作リライトの手法—

本論文は、作家大江健三郎の一九八〇年代以降の小説における文学的営為を自作リライトという手法から再検討したもので、全三部からなる。このうち第一部「一九八〇年代と一九九〇年代の小説におけるリライトと引用」においては、一九八〇年代と一九九〇年代の小説で、自作リライトは引用の手法、ジャンル論、小説論など、小説そのもの、そして書くことに関わる諸課題との関わりを明らかにし、『芽むしり仔撃ち』裁判、「茱萸の木の教え・序」などの従来ほとんど論じられてこなかった作品を新たに意味づけた。また第二部「二〇〇〇年代の小説と自作リライト（一）—「最後の小説」を中心に—」においては、『取り替え子』、『さようなら、私の本よ！』、『水死』などの作品をとりあげ、それらの作品に通底する自作リライトの特徴を完成・成熟・統合を示す「最後の小説」という概念でまとめ、各時期の大江作品の主題や手法などがどのようにリライトされているかを具体的に論証した。さらに第三部「二〇〇〇年代の小説と自作リライト（二）—「晩年の様式」というテーマ—」においては、『憂い顔の童子』、『臆たしアナベル・リイ 総毛立ち身まかりつ』、『晩年様式集』という三つの作品における自作リライトの特徴を第二部それと正反対の、反完成・反統合の「晩年の様式」で考察し、書くこと、晩年の生き方、カストロフィなどの課題が「晩年の様式」でいかに実現されたかを検討した。

序論「自作リライトという現象」において論者は、本論の言う「自作リライト」を新しい作品で過去の自作を差異化する各種の方法（引用、翻案、改作、パロディ、先行作品の受容など）を含む総合的な概念と定義し、自作リライトについての大江の発言と先行研究を整理した。そして、自作リライトの手法で書かれた大江小説群を時代順に概観し、本論の検討対象を『芽むしり仔撃ち』裁判を起点とする一九八〇年代以降の小説、特に二〇〇〇年代以降の小説に措定し、自作リライトの変奏と、自作リライトに付随する様々な文学的営為を検討の対象に入れた。

こうした問題意識のもとに、第一部では、二章にわたって一九八〇年と一九九〇年代の大江小説における自作リライトの特徴を解説した。第一章『『同時代ゲーム』の入り口としてのテキスト—『芽むしり仔撃ち』裁判論—』においては、メタフィクションの構造という視点で報告書というジャンルの虚構性を指摘し、そうした虚構の文章に構築された、歴史的かつ神話的な村は『芽むしり仔撃ち』をはじめとする初期の大江作品における監禁状態としての村に対するリライトであることを明らかにした。そして、この村という主題の再提起は問題作『同時代ゲーム』への再注目、および明示的な自作引用による自作リライトという方法を開陳していると論じた。続く第二章「反復された「四万年前のチアオイ」—「茱萸の木の教え・序」論—」では、序文というジャンルが内在する問題（虚構性、本文の自由読解の権利を奪うこと）、非明示的な自作引用と自作リライトとの関連を検討し、二作品における全体論の差異、およびその差異を根拠に構築されたそれぞれの救援思想と希望観の特質を読み解いた。

第二部「二〇〇〇年代の小説と自作リライト（一）―「最後の小説」を中心に―」では、第一部の成果を受け、二〇〇〇年代の三つの作品をとりあげて、二〇〇〇年代の小説における自作リライトの一側面を、明らかにしようと試みている。まず第三章「隠されたホモセクシュアリティ―『取り替え子（チェンジリング）』論―」においては、指示語「アレ」をめぐって、登場人物の古義人と吾良の間にまつわる、言語化できないホモセクシュアリティの問題に注目し、ホモセクシュアリティとホモソーシャルな社会のホモフォビアとの関連性について検討した。二〇〇〇年代の大江小説におけるホモセクシュアリティの表象は初期・中期作品に見られる強烈な身体表象を経由する男性同性愛表象、そして男性同性愛表象の背後に潜む絶対的な父の表象に対する更新＝リライトである、と論じた。続く第四章「誤解された宗教詩―『さようなら、私の本よ！』におけるT・S・エリオットの受容―」では、エリオットの「ゲロンチョン」と『四つの四重奏曲』は非行動型の生き方を相対化し、行動性を断念しない老人論の提出に貢献していると指摘し、このような受容のあり方は一九八〇年代から一九九〇年までの大江小説における外国語の詩の受容様式を書き換えたうえで、一九八〇年代の大江の作品で唱えられた永遠循環する現在を確定し得ない未来という時間論にリライトしたと結論づけた。第五章「リライトによる脱イデオロギーと、イデオロギーの再構築―『水死』論―」では、三つの先行作品に対するリライトを通じて、「明治の精神」を起点とする、近代の精神は国家による合理的な犯罪であるという主題を打ち出した。

第三部「二〇〇〇年代の小説と自作リライト（二）―「晩年の様式」というテーマ―」では、反統合・反完成という「晩年の様式」を特徴とする三つの作品に注目し、「晩年の様式」は自作リライトの手法によっていかに体現されたかを分析した。第六章「批評と小説の間―『憂い顔の童子』論―」においては、小説の成立と『ドン・キホーテ』、実際のシンポジウムとの関係、『取り替え子』をめぐると実際の批評と小説の生成との関連、そして過去の自作を読みなおすことから読み取った「晩年の様式」について論じた。この小説で強調されたリライトは達成・成熟を遅延化し、完成としての晩年そのものを相対化し、老いに抵抗できる永遠の生命をもたらす様式である。第七章「新しくない「新しい形式」の小説―『朧たしアナベル・リイ 総毛立ち身まかりつ』論―」では、「新しい形式」を自作リライト（書き換え・書き直し）とメタレベルの連鎖という創作方法から解釈した。第八章「終わらない「書き直し」の方法―『晩年様式集』論―」においては、サイードの『晩年のスタイル』と小説の成立との関係、そして結果・定説を拒否するという、終わらない「書き直し」の方法を提起し、その方法に伴う批評の回路と小説生成の問題をも検討した。『晩年様式集』が呈示する自作リライトの境地は「私」の解体作業に「他者」の批評を導入し、解体の過程を無限に続くということである。大江の「晩年の様式」は、こうした自己の成熟・完成を拒み、非完成・非統合という過程を維持すること、つまり自作リライトを永遠化することによって、支えられている、と指摘した。

最後の「結論 自作リライトという手法／思想と、「晩年の様式」」においては、本論の研究成果を総括し、今後の研究展望を自作リライトの手法で書かれた他の、一九八〇年代と一九九〇年代の作品に対する考察と、他の作家の作品における自作リライトの現象を研究することの二つにまとめた。